

な意味を解釈する基本図を作成することを目的としている。50万分の1地質図幅はすでに全国をカバーし、20万分の1地質図幅は全国123図幅の内82図幅を出版(66.7%)した。1992年には100万分の1日本地質図(第3版)を14年ぶりに改訂し出版した。

1995年3月には同100万分の1地質図のCD-ROM版を出版した。今後は、このようなデジタル化された地質図幅情報の提供が大きなテーマになると考えられ、地質情報センターをはじめ、関連する部門と協力して、その試みを行っている(口絵2、参照)

2. 基礎研究の推進

地質図幅はフィールドでのマッピングをベースとしながらも、常にその時点での地質に関する最新の知見と技術を駆使してデータの分析と解釈を行い、総合化をへて完成される。このために調査技術や解析技術のレベル向上を図る基礎研究は不可欠で、地質部では若手研究者の育成も含めた経常研究のテーマとしてこれを推進している。最近では「後期新生代堆積環境の研究」、「島弧におけるテクトニクスの研究」、「島弧における火成岩類の研究」などに重点を絞った課題が取り上げられている。

系統的で長期にわたる野外調査で得た膨大なフィールドのデータをベースに、その研究成果を総合化した研究を進めている。日本列島のテクトニクスやその成立過程に関する研究(鹿野, 1994)、珪藻や放射虫などの微化石を用いた詳細な標準層序の研究(柳沢, 1993; 栗本, 1994)がそれである(写真1)。また、特定の地質現象を対象に、図幅調査ではカバーできなかったテーマをさらに深化させた「ネオプルトンの冷却史の精密解析」や「丹波山地の中・古生代付加体に関する総合研究」などの研究が所内の重点基礎研究テーマとして取り上げられ実施されている。これらの研究はいずれも図幅調査で得られた膨大な野外の調査データをベースにしており、地質調査所ならではの特徴ある理論や手法の構築を試みている。

3. 地質部の構成と研究の実施

地質部は広域地質課、層序構造課、岩石地質課の3課で構成されているが、これらはそれぞれの内

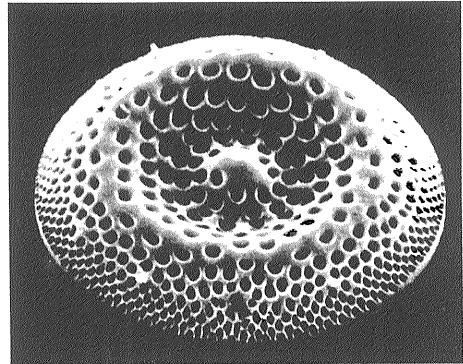


写真1 珪藻化石の例。中期中新世(14Ma前後)の *Actinocyclus ingens f. nodus* (直径約40 μ 、柳沢幸夫撮影)

容の専門研究者の集団であってその専門から各プロジェクトに参画している。地質調査所ではプロジェクト研究を中核となる部の研究者に他部の研究者が加わった研究グループで実施している。また大学や他の研究所等からの併任研究者の協力もお願いしている。たとえば平成8年度「特定地質図幅の研究」グループでは、20図幅地域の調査・研究を地質部の全員と11名の他部、15名の大学からの研究者の協力で実施する。

このように、地質部では、全員が地質図幅作成に関する調査・研究に従事している。図幅作成計画のスケジュールに比べ研究スタッフが少ないため、基礎研究への深化や総合研究へ展開する時間的余裕が十分でないのが悩みだが、野外調査で得られた豊富なデータを活用でき、それをベースに独自の研究方法の開発や総合的研究テーマを展開できる点が魅力となり日夜努力を続けている。

<文責:小玉喜三郎>

参考文献

- 鹿野和彦(1994):100万分の1日本地質図第3版に織り込まれた日本列島の成立過程。地質ニュース, no. 482, 31-41.
- 久保和也(1995):特定観測地域の地質図幅作成計画。地質ニュース, no. 494, 21-25.
- 栗本史雄(1994):放射虫生層序と5万分の1地質図幅。地質ニュース, no. 482, 21-30.
- 山根新次・三土知芳(1954):わが国の地質調査事業の沿革。地学雑誌, 63, 47-61.
- 柳沢幸夫(1993):新生代年代層序学の進歩と地質図。第5回地質調査所研究講演会資料。55-67。日本産業技術振興協会。